

ベオウルフ／呪われし勇者

2007(平成19)年12月1日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★



監督・製作＝ロバート・ゼメキス／出演＝レイ・ウィンストン／アンジェリーナ・ジョリー／アンソニー・ホプキンス／ジョン・マルコビッチ／ロビン・ライト・ベン／ブレンダン・グリーソン／クリスピン・グローバー／アリソン・ローマン (ワーナー・ブラザース映画配給／2007年アメリカ映画／114分)

第2章

映像が先か、活字が先か

……イギリス文学最古の英雄叙事詩を大人向け、男性向け(？)、かつ3-D上映できる映像でつくると、こんな風に……。筋肉美を誇る戦士の戦いと、その英雄に「抱きなさい。——そして息子を授けよ」と迫るエロティックな女の対比は、映像的には生ツバもの……。作品的にはともかく、好きか嫌いかはあなたのお好み次第で……？

イギリス最古の叙事詩が今……

日本人には全然馴染みがないが、『ベオウルフ』はイギリス最古の叙事詩とのこと、パンフレットには9行の詩が掲載され日本語訳がついている。もっともそれは、そのごく一部だけ……。そこには怪物グレンデルの名前があり、その母親の怪物も紹介されているが、それはあくまで抽象的な叙事詩。したがって、この映画はこの詩のエッセンスを活用しながら、あくまでオリジナルなストーリーを創造したもの……？

この映画にはそんなストーリー上の興味とともに、俳優の演技をコンピュータに取り込んで加工するというフルCGの最新映像上の技術が駆使されているから、その点の興味も……。とりわけ、グレンデルの母親役のアンジェリーナ・ジョリーはチョイ役ながら(？)、あっと驚く姿で登場するから、それに注目！ もっとも、こんな姿が好きか嫌い？ また色気を感じるか否かは人それぞれ。正直言うと、私はあまり好きではないが……。

大人向け、かつ男性向けのファンタジー

最近『ハリー・ポッター』シリーズ、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズ、『ナルニア国物語』シリーズ、さらに『ライラの冒険 黄金の羅針盤』（07年）など、子ども向けのファンタジー映画が多いが、『ベオウルフ／呪われし勇者』は大人向け、かつ男性向けのファンタジー映画。

今は男も力より美しさ（小ざれいさ？）を求め、また権力よりやさしさを求める風潮が強いが、昔は男は力がすべてだった。そして、女はいかに強い男と一緒にになり、その子供を産むかを考え、そのため美しさを磨いたもの。そんな、力を求めて生きる男の典型がベオウルフ（レイ・ウィンストン）。他方、怪物グレンデル（クリスピン・グローバー）がベオウルフによって成敗されたと知るや、たちまちベオウルフの前に美しい裸体をさらし、「抱きなさい。——そして息子を授けよ」と迫るグレンデルの母（アンジェリーナ・ジョリー）は、あの時代の女の生き方の典型！

もちろんファンタジーだから、前半はグレンデルが暴れ回ったり、後半は火を噴く巨大なドラゴンが暴れ回るシーンが見モノ。したがって、それはそれとして楽しめばいいのだが、大人の目からは、こんなヒーローの生きざまとヒロインの生きざまに注目しなければ……。

ベオウルフはなぜフローズガールの国へ……？

映画の冒頭、天下の名優アンソニー・ホプキンス扮する国王フローズガールを讃える宴会のシーンが続いていく。その傍に座る美しい女王ウィールソー（ロビン・ライト・ペン）や腹心の部下アンファース（ジョン・マルコビッチ）らに支えられて、その王国は隆盛を極めているよう。

それが一変したのは、怪物グレンデルの襲撃を受けたため。いくら腕に覚えのある戦士でも、所詮体格が10倍以上も違うグレンデルに対抗できるはずはなく、グレンデルが去った後、宴会場は地獄のような有り様。フローズガールはこの屋敷を永久閉鎖し、全世界から広くグレンデルを倒してくれる勇者を募ったが、今までのところ誰も成功していないらしい……。

そんな中、呪われた王国へ海の向こうからやってきた男がベオウルフ。彼の目的はただ1つ、戦士としてその名を世間にとどろかせるため。彼は自信満々だが、腹心の

アンファースたちがそれを不安そうに見守ったのは仕方のないところ……。

裸での対決には違和感が……

この映画前半の見どころは、怪物グレンデルと戦士ベオウルフとの対決。しかし、ベオウルフがいくら勇者でも、こんな怪物にまともに真正面から剣で立ち向かったら、到底勝ち目がないと予想するのが大方の見方。腹心のアンファースもそうだし、私もそう。

そこでベオウルフがとった戦法は、いわば1976年のモハメッド・アリ vs. アントニオ猪木の対決において、アントニオ猪木がアリのパンチを避けるため、寝っころがって足ワザだけで勝負したような奇想天外なもの。つまり、「鎧も武器も要らない。相手が素手なら、こちらも生身で戦うまで」というものだ。勇者も、鎧兜に身を固めていればサマになるが、すっぽんぽんの姿では、いくら筋肉隆々たる上半身であっても、あまりサマになるものではない。したがって、裸での対決には少し違和感が……？しかし、そんな少なくとも観客に対しては不自由な動きの中、見事ベオウルフは……？

ベオウルフも、重大な偽装を……

2007年を象徴する漢字は断トツで「偽」と決まったが、人間が偽装するのは最近のニッポン国だけではなく、神代の昔から。そして、それは勇者ベオウルフだって……？

偽装するには必ず動機がある。船場吉兆をはじめ、その多くは儲けたいという金銭的、経済的動機だが、ベオウルフの場合はそれプラス色気。つまり、グレンデルの母の性的(?)魅力に負けたベオウルフは、莫大な富、永遠の力、そして偉大なる王の称号を手に入れるのと引きかえに、重大な代償を……。

「英雄色を好む」、とはよく言ったもの……

フローズガールも王国がグレンデルに襲われるまでは勇猛な戦士だったが、美人妻のウィールソーとは略略結婚だったようで、当然すごい亭主関白。そのうえ別の女に手を出していたから、ウィールソーはおかんむり。

そんな風に夫婦仲がイマイチの時に、すばらしい肉体美を誇る戦士が現れ、自分に

対して熱いまなざしを向けてくれば、女心が燃えあがったのは当然。そのうえ、その戦士が見事グレンデルをやっつけて王国のヒーローになり、次期政権の継承者になろうとしたのだから、なおさら2人の仲は……？

そんな状況下、ある日フロースガールはあっと驚く行動を……？ ひょっとして、これはグレンデルの母親の呪いのせい……？ しかして、ウィールソーはすんなりベオウルフの王妃に横すべりした(?)ののだが、「英雄色を好む」、とはよく言ったもの。それから数年経った今、ベオウルフは侍女のウルスラ(アリソン・ローマン)とうまくやっているようで、再びウィールソーはフロースガールの時と同じようなイライラを……。

ナンバー2は最後まで……

この映画には、地味な役割ながらいつもベオウルフをサポートする忠臣のウィグラーフ(ブレンダン・グリーンソン)が登場し、ベオウルフの戦いを最後まで見守ることになる。もっとも、そんなウィグラーフも一時はベオウルフの暴君ぶりに不満を示すこともあったようだが、とにもかくにも最後まで忠臣の立場を貫いたのは立派。

このウィグラーフがいたからこそ、あらゆる場面においてベオウルフがヒーローとして目立った活躍をすることができたことをベオウルフはきちんと自覚し、こんなナンバー2に感謝しなければ……。

やはり3-Dで観た方が……

私が2007年10月10日に北京電影学院で特別講義をすることができたのは、古澤敏文氏のお世話のおかげだが、現在の彼の興味め的是は3-D映画(立体映画)。技術的には既に十分開発されているらしいが、日本ではその実用化になかなかはずみが見つからないらしい。それはやはり、いちいちあのおもちゃみたいな「メガネ」をかけるのが面倒くさいため……？

この『ベオウルフ/呪われし勇者』は特殊な映像技術を用いているから、3-D上映ができるようで、現に「梅田ブルク7」では特別料金をとって3-D上映をやっている。映画前半のベオウルフとグレンデルとの対決、後半のベオウルフと火を噴くドラゴンとの対決のシーンなどは、やはり3-D上映で観た方が面白そうだ。

2007(平成19)年12月14日記